国語方言学

言語地理学

江實

國語科學講座

— VII —

國語方言學

言語地理學

江　實

株式會社
明治書院

國語科學講座

— VII —

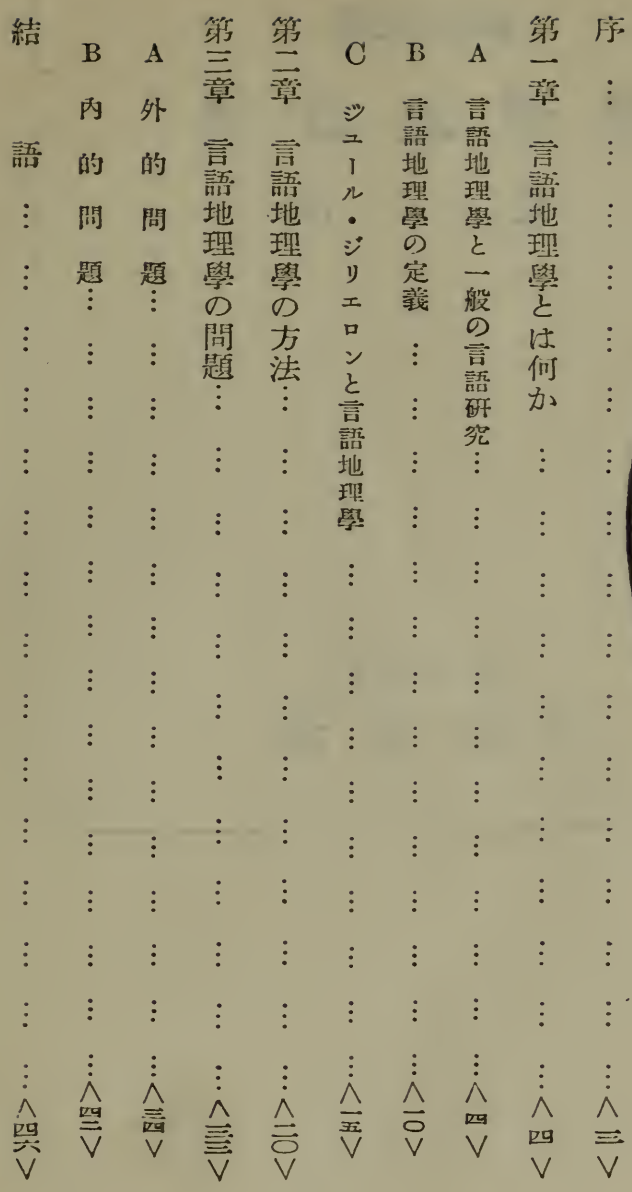
國語方言學

言語地理學

江 實

株式會社

明治書院

目次

言語地理學

江　實

序

所謂「言語地理學」は、如何なる方法を持ち、如何なる對象を調べ、如何なる問題を取扱ふものであるか。これに答へようとするのが本講の目的である。

元來この「言語地理學」は極く最近勃興せるにもかゝはらず、その業績に於ては極めて顯著なるものがある。すなはち、この言語地理學は、今世紀初頭のフランスにまづ胚胎し、フランスは勿論、スペイン、イタリー等の現在の地方言語事實の本體をあきらかにしたのである。これら諸國の言語は、すべてロマン語系統に所屬するものであるからして、言語地理學に準據する研究の可能はいふまでもないが、この言語地理學は事實に於て、語系の如何をとはず、すべての言語にまで、その應用範圍を擴めることが出來るものである。したがつて、地方言語事實の研究の旺盛なる近時の我國の如きにあつては、この學を充分に考察してみる必要があると信ずる。よつて、筆者は、これまでの成果に

微しつゝ、その主要部分を考察してみようと思ふ。

しからば、まづ「言語地理學」は、如何にして胚胎し、或は、現在如何なる位置を一般の言語研究の分野に於て占めてをるか。

第一章　言語地理學とは何か

A　言語地理學と一般の言語研究

言語の生活は、一見したところでは、その變化はすこぶる多岐に渉つて、とりとめがたくみうけられるが、事實に於ては、そこに一定の出發と一定の目的とがみあたるのである。この點にもつぱら着眼し、言語の生活を、丁度一般の生活と同樣に、一つの計畫ある營みをもつものとし、その歩みをたどらうとするところに言語の研究は胚胎してゐるのである。してみると、廣い意味の言語の研究は、しばらく某々の特別な言語のそれとは獨立に、人間の思考の表現樣式に關する事實をあきらめ、そこに法則を立てるところにはじまり、またそこに終はることを目指してゐるものと考へることができよう。しかしながら、かゝる一般的の態度を進めていくうちには、自づとそこに特殊なる態度が結成されてくる。卽ちまづ言語の構成的諸要素の體系的研究を行ふかぎり、そこに所與の諸言語の狀態を登錄し、その發展と變遷とを研究し、さらに、これをたよりとして、諸言語間の對應をあきらかにし、もつて、これらの諸言語間に存在する諸關係を研究しようとする態度等が生じてくる。この前者は一般文法の研究態度で、これに依つて言語の一般的研究が行はれる。後者は夫々記述文法・歷史文法・比較文法を特徵づける態度で、これに依つて言語は可成

り具體的に研究される。以上のうち、特に後者の諸文法は、言語史が示す如く、近世の科學精神に伴つて生じた言語の體系的研究の推移の跡を示す。斯樣に現在、言語學には幾つかの主要研究領域が見當るが、事實に於ては、これ等は互ひに扶けあはずには個有の領域をさへ充分に究明し難いものである。特に後者と前者の關係は注意を要する。即ち記述文法・歷史文法・比較文法は、まづ各々の研究領域を嚴重に探求する事は勿論として、その窮極の目的はこの各々の視角から言語の全體に觸れていく事を目指し、換言すればこれ等は等しく一般文法の領域と密接なる關係を結ばねばならない。併しこのためには、これ等が同時に部分的と全體的との研究を確保せねばならぬから常に困難である。例へば科學的言語研究として嚴正を誇る比較言語學―後述の如くこの學は言語地理學の成立に直接の關係がある―にしても然るのである。簡單に、この學が一般言語研究に對して充分なる寄與を爲し得なかつた理由を求めれば、次の二點に歸する。第一はこの學が、周知の如く、前世紀のドイツの比較言語學者の手によつて主として大成された事、即ち彼等が個有の分析氣質に當時旺盛なる自然科學的精神を加へて、言語を餘りにも細密なる構成要素へ分解してしまつた點である。第二は最も根本的であるが、この學が專ら文獻に研究資料を求めた點である。これに關してはメイエがその著「史的言語學に於ける比較の方法」に於て、次の如く述べてゐる―

〈誰でも比較言語學的の仕事をしたことのあるものは、相互比較のために引當てられた言語事實が水準を異にするために如何に我々を惱ますものであるかを知つてゐる。我々は姑くこれを抽象して仕事を進めるより外に道がないのである。例へば印歐諸語に關して仕事をする比較言語學者は略〻三千年の期間の中に日附け持つ事實を扱ふわけであるが、しかもこの事實は或る時期には非常に豐富であり、他の時期には全く缺如し、或は一の地域には充滿してゐる

と思へば他の地域については全くその徴證がない。從つて引き當てをなす前に、その要素を仔細に批判する必要がある。印歐語の比較文典においては、何れかの側で幾分なりとも不足してゐない引き當てはないのである(1)〉。

即ちかやうな不足がちな足掛りによつて、印歐語比較言語學者は次第に本領とする原始印歐語の推定に從事し、その古代の面影を描き出すことには成功したのであつたが、實はそこに於ては、その原始語の使用者、使用年代及び使用領域は始めからこれを度外視してかゝらねばならなかつた。換言すれば、かゝる比較言語學は、甚だ尊敬さるべき研究ではあるが、この內部的の事情に規定されて、話者は考慮の圏外におき、周圍の環境は充分に考慮しなかつた。したがつて、そこでは言語活動は最も抽象的にしか闡明されなかつたのである。

しかも人が元來、人間の思考の表現樣式に關する事實を如實にあきらめ、そこに彈力に富める理法をみいださうとして言語の研究をつゞけるかぎり、當然反動は生じてくるのであつて、さきに比較言語學に於て、要素へ、要素へと仔細に批判が加へられ、分析に分析がかけられて、バラバラに解剖された語彙とか、或は手荒にひつくりかへされたフォネチックなどは、反對に綜合され、統制されねばならぬのである(2)。したがつて、人がこの綜合或は統制を行つて、言語の實體により近づかんと努めるかぎり、益々相互比較のために用ゐられる言語資料が、各々水準を同じくし、それを用ゐる人と時と所の明白な、いひかへれば諸條件の大方整つた言語研究が行はれねばならぬ。蓋し印歐語比較言語學からロマン語比較言語學にうつゝたのも、この事情によるものであり、後者の研究が更に研究領域を狹めて、これを構成する諸語各々のうちの、特に地方言語事實の探求にうつゝたのも亦この事情によるのである。

斯樣な研究領域の縮少は退歩ではなくして、むしろ進歩とよばれるであらう。なんとなれば、斯樣な地方言語事實

によつてはじめて、人は望まれた闊達なる言語研究を、よくなしとげることが出來るであらうからであり、逆にいへば、こゝには生地の未だ採録されざる亘多の地方言語事實が同一の條件のもとに横はつてゐて、言語の元の狀態の保存と改新との規則性を自づと物語ると考へられ、從來あきらかにされてきた規則がこの事實によつて更に嚴密に吟味されうるばかりでなく、人はかゝる言語事實によつて言語意識をさへ辿ることができるからである。

斯様な研究は從來とて缺けてはゐなかつた。卽ち方言研究がこれである。この研究は、いづれの國をとはず、相當長い歷史をもつてゐて、多くの言語事象の論考はこれから多大の支援をうけてゐる。しかしながらそこにあつては、先づ「方言」そのものの概念が元來統一されえないのを常としたので、研究の中心は、やゝともすれば移動し、人々は多大の期待を持ちうることをしりながら、概念のとりおさへに疲れ、充分なる事實上の結果をあげあぐんでゐたのである。(3) これを切りぬけるには、まづ方言といふ觀念よりも、具體的な方言事實に着眼し、(4) この亘多きはまる方言事實のうち研究目的にかなふものに適宜に撰擇を加へ、例へば音韻の方面にあつても、語彙の方面にあつても、あるがまま聽かれるがまゝのものを計畫的に採録し、かゝる採録の結果をいくつか積み重ね研究することによつて、現在の方言活動を一部分づゝ解決し、やがて言語の實體をあきらかにしていからうとする方法がとられてくるのである。科學研究史が示す様に、この種の方法は、元來事實を通して始終するフランス學派のよくする所であり、また言語研究に於ても事實この學派に屬するスイス生れのジュール・ジリエロン(Jules Gilliéron)の手によつてはじめて偉力が示されたのであつて、爾來、人はかゝる研究を「言語地理學」と名づけてゐる。

一般に言語研究の分野に言語地理學が出現してきたのは、上述の如く、史的言語學或は比較言語學が、それぞれ內

部的事情によつて、個有の研究領域にとどまり―またそこに留まることによつて精緻なる研究と見なされるものであるが―、他方人々の言語研究の目的がひろく言語の實情に則して、言語事象を闡明しようとする意圖が強く存したからである。かくして、研究の條件の整つた言語の地理學的方法は、その誕生以來まことに大きな衝動を與へ、例へばその發生地のフランスの言語研究の面目を一新し、ひいては特徴ある言語學をその國にもたらし、更にロマン語比較言語學を印歐語比較言語學に比して一段と精彩あるものとしてゐると云はれてゐる。這般の事情の一班は、ミヤルデ(Millardet)の次の筆致のうちにうかゞへるのである―〈地理學的方法の出現とその進歩とは、方言學を進歩させた。この十五年來といふものは、ほとんど總ての若いロマニストは、とりわけフランスでは、方言の研究に向つた。ジリエロンの影響である〉と。(5)〔しかも、このミヤルデの論述の大方は、フランスに於ける方言調査の現在の熱狂が、どこまで正當なものであるかといふことを、批判するためにかゝれたものなのであるからして、更に興味ふかい次第である〕。とにかく、諸種の條件の整つた言語地理學が方言學と同樣に、一般の言語研究に於てしめる位置は、外貌小なりといへども、なほ且つ獨自のものといはれるのであつて、現在では、この研究法を無視しては言語研究を着實にすゝめることが出來えないであらうとされてゐる。しかも、この言語研究の新方法は、佛蘭西をのぞいては、その近隣のロマン語の系統をひく言語使用國に於て、目下しきりに研究されつゝあるものであり、その他の國々に於ては、漸くその方法が研究されはじめんとする程度であることゝ、他方には、元來一定の埒外からやゝともすると脱しがちな地方言語事實に着眼して、學問の概念的の柄の大きさばかりを着目するものでなく、換言すれば與つた歷史のあまりに新しきことゝ、その研究の態度があまりに捕へがたい事實に即するものである爲に、「言語地理學とは何ぞや」

といふ定義づけも充分行はれてゐないのである。人々が手さぐりに、言語地理學とはかく〳〵のものであると恣意的にきめて、或は極く狹く或は廣く解してゐることは、丁度現在、地理學・歴史學の方面にいちゞるしく勃興しつゝある歴史地理學の事情と甚だ類似してゐる。

とにかく言語地理學は、現在の地方言語事實—これは近代的な混淆と浸潤を伴ふ、老・若、平均の異常な語形の錦織である—の全斑を言語の史的發展の一斷面と解し、事實のつげる所に隨つて、この斷面の樣相に適當なる解譯を加へていかうとするに在る。いふまでもなく、實證的であることゝ、論證的であることゝは、時にあつては同一物の兩面を指してゐる。したがつて、言語地理學を實證的且つ論證的であるとするのは、これが現在吾々が耳にし、口にするところの多數の資料によつて、複雜な推移をとげる言語事象を研究することが、たゞちに論證的な最も眞實に近い結果を生むと信じ、逆にいへば理論は常に充分なる事實によつてしか理論となりえないと信ずるがためである。言語は、もと〳〵、これを純理論的に取りあつかはんとする者の自由になるには余りに複雜な言語事實の支援によつて構成されてゐるものである。したがつて、言語を研究する學問は丁度社會學と同樣に、すぐれた純理論家をもつてしても自由に裁量しきれない多くの面を研究の對象とする。そこに一定の理法をさぐりだし、論證的なる說明を與へるためには、かゝる事情にもめげず、臆せず、やはり現在あるがまゝの言語事實にしたがつて着實に事象を整理して、理論の裏附を行つていく實證的な研究法が注目されるべきである。言語地理學の發生の動機も、この點にある。從つて言語地理學の一般の言語研究に占める位置は、その目指すところにしたがつて、從來の言語研究にひきくらべて、きはめて獨自なものとすることができよう。

以上は、もつぱら「言語地理學」が如何なる方法と對象と問題とを有するものと解されてゐるかといふことを考察していくために、まづこの學問が一般の言語研究の分野にいかなる理由によつて出現してきたかを略述し、ついでこれがその分野に占める位置と獨自の形貌を探り、且つその勃興のあまりに新しきによつても、これを定義づけることも充分には行はれてをらぬことを述べてきた。以下、少しく詳密に言語地理學に關係ある諸事項について記述をすゝめようと思ふが、その手がかりとして、まづ現在の言語學の方面に於て、言語地理學がどんな概念と對象と目的とを有するものと解されてゐるかを、一應極めて簡單にしるして、これと、更にこの學問の創始者と見なされてゐるジリエロンの意圖したところとを對比しつゝ、言語地理學とは如何なる學問をさすかといふことに進み、更に、そこに行はれる諸種の檢討に移つていかうと思ふ。しからば、まづ言語地理學とは、現在の言語學に於て、いかなる定義を下されてゐるか。

註
1 A. meillet, La méthode comparative en linguistique historique, 1925, 泉井久之助氏の譯書による。
2 メイエの上掲原書及び譯書の第五章「方言(Les Dialectes)」を參照。
3 Albert Dauzat, Les Patois 95–96.
4 メイエ「言語學」(藤岡博士譯、第四頁—第五頁參照、日佛會館編、佛蘭西科學、下卷分册Ⅱ)
5 Georges Millardet, Linguistique et dialectologie romanes, 1932, 90.

B 言語地理學の定義

前章にのべた様に言語地理學の出現は、一般の言語研究に多大の刺戟を與へた。そこでこの研究方法による實際的

の調査ばかりでなく、これを概説しようとする試みも近頃の言語學書に散見するのである。例へば、メイエも、さきにあげた「史的言語學に於ける比較の方法」のうちに「言語地理學」の一章を加へることを忘れてゐないし、ブルームフィールド(Bloomfield)も舊著の改訂本「言語」には「方言地理學」の一項目を加へてゐる。[1] 然しこれ等にあつては、言語地理學の定義は全部の行間のうちに巧みにたゞよはされてゐるばかりである。從つて、もし吾々がこの定義についてより明確に知らうとするならば、これを別の述作のうちに尋ねてみねばならない。例へば、マルーゾ(J. Marouzeau)の「言語學專用語辭典」をとつてみよう。[2] そこでは、編者は、言語地理學について次の樣にのべてゐる――〈言語地理學(géographie linguistique 〔Sprachgeographie〕)とは、言語現象の分布領域をはつきりとみてとることを眞の目的とする學問である。音韻變化の領域を觀察するか或は單語そのものの分布地帶を觀察するかにしたがつて、音韻地理學(géographie phonétique 〔Lautgeographie〕)と單語地理學(géographie lexicologique 〔Wortgeographie〕)とに分けることができる〉と。極めて漠たるものがある。これに對してガミルシェーク(Gamillscheg)は――〈言語地理學は、たとへば、植物地理學とか動物地理學とかがあるのと同じ意味あひで、言語と言語の地上の分布に關する科學的の研究が生じた時からはじまつてゐる。しかし、今までのやうに、個々の言語や方言(Mundart)の地域的分布を單にきめていくことに躊躇せず、すすんで、この分布からして、種類の如何を問はず、言語現象の發生と消長とを明らかにしようとつとめるのが所謂今日の言語地理學なのである〉といふ意味のことをのべてゐる。[3] マルーゾにあつては――〈言語現象の分布領域をはつきりとみてとる〉とはいつてあるもののこのはつきりとみてとるといふことは、これが分布領域に關するかぎり、曖昧の述べかたであるが、ガミルシェークは、言語や方言の地理的分布を單にきめていくこと

は意味のないことで、本領はこれからして言語現象の發生と消長とをさがしだしてくる點にあるとしてゐる。これは眞の意味の言語地理學にちかい見解である。更に、アルベール・ドーザが自著の「言語地理學」或は「俚言」のうちにのべる言語地理學に關する論述も、これを逸することはできないが、後に多くこれを引用するところがあるからして、その際に譲つて、ここでは、京城の小林英夫氏が、はやくも昭和三年に、「方言學・その理論と實際」と題されて斯界におくられた注目すべき論文のうちにみえる、言語地理學に關する高見をひいてみよう。[4]（因に、小林氏は、同論文の附記に、これは上記のドーザの「言語地理學」に據られて書かれたと明示されてゐるが、むしろ隨所に、氏の創見がみうけられるのではなからうか）。曰く—

〈一言語に時が作用するとき、それは必然的に分裂する—分裂の原因・模樣等は玆での問題でない。玆では分裂したものが與へられてゐるのだ—その分裂したものが更に下位分裂をする。かくして無限に(可能である)。かやうな關係に於ける分裂せるもの、下位分裂せるもの、下位々々分裂せるものを方言 dialect と名づける。……

然るに言主、言衆の地理的背景を考慮圏に入れるときに、彼らの話す言語を俚語 patois と名づける。だから俚語は現實的な方言である。

さて土語 parler, Mundart とは任意の社會團體(或は社會階級)に話される言語を云ふ。

さて方言學は dialectologie である。方言學がいま定義したやうな意味の方言を研究對象とするものならば、それは特殊な一學科を言語學内に建てる必要も理由もない筈である。それは一般言語學の考慮圏内に在り、謂はゆる「比較言語學」の獨自の對象となるものである。されば方言學なるものは、その名に背いても、寧ろ俚語を研究するもの

でなくてはならぬ。事實、方言學なる名稱の下に行はれてゐる研究は、俚語を對象としてをるのである。

俚語は之を話す主體を通じて色々な點で土地に規定されてゐる……。

そこで、研究法上さうした改新流の個々について調査せねばならぬ方言學は、どうしてもその俚語を話す人間の居住する土地の地理的情勢を知ることが必要となつて來る。方言學のさうした實地調査に從事する研究部門を言語地理學 géographie linguistique と云ふ。……また、方言學の具體的な研究法（言語地理學、言語製圖學）、或は、言語地理調査はかくの如く、在るがまゝの事をしたためて地圖を機械的に作製すれば用は濟んだのである。併しそれだけでは價の半ばを見捨てて置くものである。地圖は須く解譯されねばならぬ。解譯することによつて言語地理學は言語地質學にまで進展するのである＞。―便宜上、拔き書となつたが―。

これは極めて明斷なる所論と申さねばならない。とにかく小林氏によつて、方言學と言語地理學と言語地質學とは相互に連關するところがあるにしても、截然と區別されたのである。

更に東條操先生は多くの論文を通じて、方言學と言語地理學とを唱導されて居られることは人の知る所であるが、例へば「方言研究の概觀」（岩波講座「日本文學」）の冒頭の一章はこの方言學と言語地理學との關係を最も詳密にとかれてゐるのであつて、同書、第十頁には、次の如く見えてゐる―

＜第一に言語地理學は單語、語法、形式の各個をその研究の主題とし、その分布を圖示し研究する。然るに方言學では一地方を單位としてその地方內の一切の言語事實を記載し、どこまでも地方を主題とする―。

第二に言語地理學はその性質上、相當廣き地域を調査範圍とする事が第一條件である。然るに方言學の調査する範

圍は寧ろ狹小なる方が調査が完全に出來る。

第三に言語地理學は選ばれたる地點に於て選ばれたる言葉を調査する。然るに方言學はかゝる選擇をしないでも差支えない、否、理想的に於ては一地方のあらゆる地點のあらゆる言葉を網羅せんとするものである(言語地理學は大體、全國的調査を少數の人で行ふので、かゝる全體的調査は望めない)。

第四、言語地理學では質問集にあぐべき標語の選擇は全國の方言の狀態に通じたものの手で周到に作成せられないと調査は失敗に終る、その代り、この質問集をもつて調査する採集者は音表記法の知識以外には必ずしもあまり多くの言語學的知識を要しない。然るに方言學の方は調査者に言語學の素養が相當に必要である、その代り地方方言の豫備的知識は無いでもよい。なほ、調査物の整理の上に兩者には著しい相違があるV。

以上内外諸家の說に據つて、言語地理學が現在いかに理解されてゐるものであるかを示してきた。で、この諸說を通してみても、言語地理學に關する見解の相違がなほ幾分存することがわかるのである。問題は、言語地理學が、地方言語事實の分布を實際的に調査するのを本領とするものであるか—この場合は所謂、地域觀念は地理の背後に多くふくまれてゐる—、或はかゝる分布の實際的の調査は外的條件として、むしろかかる分布狀態が言語事實の史的變遷を示すものと考へる史的言語學或は比較言語學の態度を持し、更にこの態度からして、逆に分布狀態の實際的の調査を適宜に營んでいくのを本領とするものであるか—この場合は、所謂、地域・地理の觀念よりも地質學或は地層學というふ地理學の上での史學の觀念が多くふくまれる—、このいづれと考へるかにある。とにかく吾々は、ひとまづ、この疑問を抱いたまゝ、これに對して創始者ジリエロンの意見が、奈邊にあるかをさぐつてみよう。

註
1 Leonald Bloomfield, 〔Introduction to the study of language, 1924.〕 Language19, P. 321-345, Dialect geography.
2 J. Marouzeau, Lexique de la terminologie linguistique, 1933, P.87.
3 Ernst Gamillscheg, Die Sprachgeographie und ihre Ergebnisse für die allgemeine Sprachwissenschaft. 1928, S. I.
4 小林英夫、「民族」、第三卷、第三號、第七十七頁―第八十八頁。

C ジュール・ジリエロンと言語地理學

「フランス言語圖卷」と、ジュール・ジリエロンとについては我國では、新村先生が、「佛國言語學界の近況」（帝國教育、三三一、明治四十年四月、東方言語史叢考所收）のうちに、いちはやくも報ぜられてゐるのがみえるが、昭和に至つて、方言學が勃興すると、東條先生・小林英夫氏によつて、彼のこの學問的業績について、委細に報ぜられ、今はこの方面にたづさはるものの常識となつてゐると思はれるからして、ここではふかく觸れないが、ただはからずもスヰスの一新聞に、彼の一生を記したものがのつてゐたので以下そのあらましを載せておきたいと思ふ―

〈一九二五年、復活祭を眼の前にして、天才的言語學者ジュール・ジリエロンの重患に惱む身はパリからスヰスの故郷にうつされた。そこはビーラ湖に面した日當りのよい斜面地で、彼がかねて終焉の地とさだめてゐたところであつた〉―と先づフープシュミード教授(Hubschmied)は先師のネクロロジーの冒頭を記してゐる。この一文は、短いものではあるが、言語地理學を創めた巨匠の面影をよく傳へてゐて、吾々はそこから斯學が如何にしてうまれてき、如何なる改新を從前の言語研究に與へたものであるかを知ることができるであらう。ネクロロジーは續く―〈ジリエロンは元來新教徒の出で、その父はすぐれた地質學的研究によつて名譽の稱號をうけてゐた人であつた。ジリエロン

の師はヤコブ・ブルクハルト(Jacob Burckhardt)とガストン・パリス(Gaston Pariſsx)であつたが、吾々がなほあげねばならないのは、彼をフランスの方言研究に導いたバーゼルのジュール・コルニユ(Gules Crnu)であらう。一八八〇年、ジリエロンはパリの高等研究院でワロン方言を用ゐるビオナーズ村の方言研究を完成した。ついで一八八三年にはこの高等研究院でフランス方言學に關する授業を擔當するに至つた。ルスロー師(Rossellot)と「ガロ・ロマン方言雜誌」を發刊したのもこの頃のことである。かかる間にあつても彼は休暇を利用してはフランス方言領域の調査をひろく企て、つひには言語學が堅實なる基礎に立つ必要にせまられてゐるのを看て取つた。基礎とは何か。言語圖卷である。精彩なる記號を用ゐた、領域の言語を示す忠實な寫眞で、偏見に富んだ理論に少しも歪められぬ要具である。かくして彼は記念碑的な「フランス言語圖卷」をつくつた。この方面での無比のものである。約二千枚の地圖の上にフランス方言の語彙の大量が載せられてゐて、これらは異常に鋭い耳の持主で、言語學的素養に缺けてゐたのが却つて幸して所謂音韻法則にしたがつて記載を劃一的にしようとはしなかつたエドモン(Edomont)によつて記入されたものであつた。研究者は一枚の地圖の上に、標準語のある概念が六百以上のフランス方言で再現されてゐる情況をよくしることができるのである。かくしてこの圖卷中の資料を基とした十七の言語地理學的研究が相ついでジリエロンの手によつて發表され、ここに彼の光輝ある全盛期がはじまつた。これらの研究は、例へばその最初のものとして著名な「ガロ・ロマンに於ける鋸で挽く」にみえてゐるやうに、その研究法に於て全く斬新なもので、緻密なロジックによる傑作で、しかも論理的な論證に通有な活氣のない抽象的な言葉つきで書かれたものではなく、物を直覺的につかみとる藝術家の情熱的な、若々しい、火氣をすら伴つた言葉つきで現象が躍如として描かれてゐるものである。

これらの言語地理學的研究はすべて高等研究院の授業に胚胎した。吾々はそこで彼の授業についてのべよう。彼の授業は全くいき〳〵とし且つ人の肺腑を衝くものであつた。偉軀は教壇の上を興奮してあちこちと歩き、力強い聲音で問題と解答とをソクラテス的方法にしたがつて―しかし勿論ソクラテスの沈着と冷靜とは拔きにして―示すのであつた。彼がもつともよろこんだのは彼がさし向けた難問を學生自らをして解決させるに至らした時であつた。過去二十年の間に於て斯樣に深い多產的な思想はジリエロンを措いて他のどの言語學者からもうまれてゐない。具體的な事實についていへば、彼はまづ語彙の語形或は音韻の地理學的分布からして結論をひき出すことを示し、言語學に對する新見解たる「二つの語彙の音韻的衝突」が言語生活に於て如何なる豫想外の意義をもつてゐるかを示し、言語の表現を全うするにあたつて話者の「自意識」が如何に働くかを敎へた。

他方ジリエロンほど全く自分の考へで始終した學者はおそらく例をみないであらう。彼は所謂學問の仕來りには追隨せず、又他人が書いたものは極めて僅かしか讀まなかつた。彼の批判力は銳かつた―彼自身に對してさへも。彼が性癖にひきづられて他人との論戰に出馬したことも一再には止まらない。しかも正直と卒直さとの他に非凡な人物の本質的な特徵たる暖い心を持つてゐた。このことは彼の知友ばかりでなく、ビーラー湖の向ひ側の客を厚遇する氣持のよい家庭を屢々巡禮の如く訪れ、彼等の先生の許で忘れ難い時をすごしたスヰスの學生もよく知つてゐる。ジリエロンは普通人より遙かに強く喜悅と悲哀とを感じた。ミュツセの一つの詩、または極めて拙劣な民謠でもが彼の心をゆさぶり、彼をして涕涙のうちにひきいれた。

ベルン大學は數年前に名譽博士の稱號をあたへ、遠くマンチスター大學も同じくこれを贈らんとした。しかも彼の

死の直後に漸くこのためにもマンチェスターを訪れよとの招待が屆いたのであつた。彼はかかる尊敬をよろこんだ—名譽を少しも求めなかつたとはいへ。彼は質朴且つ控へ目に生活し、靜かに生涯と別れをつげた。彼は埋葬に先き立つて死を友人知已に通知せぬことを願つた—事實さうもされたのであつたが。その棺側に附添ふものとては僅かに愛する家族のみであつた。唯一の花環が彼を飾つた。それはベルン大學からおくられたものであつた＞—（新チューリッヒ新聞、一九二六年五月六日、所載）。

吾々は以上の一文によつて、この一天才の人爲を可成りしることができるであらう。そこで、つぎに吾々は、當面の問題として、この開基者のいだく言語地理學に關する意見が奈邊に在るかを、彼の十七の論文の、しかも全く最初の、最も記念すべき—「ガロ・ロマンに於ける鋸で挽くについて」(Seier dans la gaule romane, 1905) の中にきいてみよう。冒頭に研究綱領を示して曰く—

＜巴里の街路で拾つた子安貝の殼と、この地球を蔽ふ第二紀成層或は第三紀成層の一つから採集した子安貝の殼とは、その貝殼の種類の起源と歴史とを研究する段になると、單に同じ重要さのものとみることはできない。これは單語にあつても同じである。一つの單語が一地點に限つて用ゐられてゐると臆測することほど出すぎた考へはない。斯樣な考へは、語辭をことさら孤立の位置に据ゑ、且つこれを自然の環境からして剝奪しさるものである。一語は嚴密な自己の地理學的條件を有し、從つてこの條件をあきらかにするのが何よりも肝要なのである。で、地理學的事實は應々單語の歴史の祕鑰である。地理學的條件に左右されて、ある地點で明確になる語源が、他の地點では不可能である。單語の諸床（クーシュ）が現に土壤に共存するとしよう。かやうな場合には、一床が他の一床に對して下位層であり、かくし

てこの關係が次々と續くことを證明することが生じる。そこで吾々は單語を年代順に位置づけ、それらの間の關係を定め、それらの成り立ちを再構成せしめる言語活動の一個の地理學或は地質學を成就する必要がある。從來等閑に附されてきたこの觀點—單語の地理學的配列—の本源的重要さを吾々の視野にひきいれたのは「言語圖卷」の諸地圖の研究である。これらの地圖は地質學の地圖と同じく、彩色しておかねばならない。卽ち、第二義的な差異はしばらく措き、俚語はタイプによつて一系統をなし且つこれらの別々のタイプは別々の分布領域を蔽ふが、この分布領域を色で見分をつけておくのが便利である。單にこれらの色を考へてみるだけで、そこに大雄辯が藏されてくるのである。一語の勝ち誇つた擴張振り—普通では標準語であるが—、他の一語のいやまさる敗滅、互に飽々相摩し、相手に傷つけられ或は相手を壓倒する諸分布領域が、よし莊重の語に於てでなくとも、少くとも日常茶飯の語に於て攻防相つとめつつ今まで持續してきたし、また現に續けてゐる鬪爭、ある語の有する必然第二義的な且つ歷史的に後代に屬する性質、絕えざる且つ獨立的の出現によつて檢證される某々の現象の明白なる自發性、蔽ひかぶさつてくる波濤に打たれながら、なほ未だ打ち沈められず、破壞物の狀態の殘存である若干の小嶋の抵抗振り、言語活動のかくも多種多様なる生活を示す以上の諸事實並びその他の事實の多くが、この地圖の上に力強く描かれてゐて、吾々はこれによつて單語の曖昧なる歷史にもぐりこみ、果てはこれによつて物と觀念との曖昧なる歷史の中にえぐりこんでいくことができる。從つて、吾々はすべての語辭研究の基礎に地圖の吟味を置く。

吾々のこの研究方法をまづ最初に適用するにあたつて、吾々は—資料を純粹に地理學的なるものに求め—南部及び東部ゴールに於ける「鋸で挽く」(Seier)といふ語の研究を意圖せんとするV。

かやうな態度で彼はガロ・ロマンに於ける、「鋸で挽く」といふ語の歴史を研究したのである。―それの實證的方面については、後にのべるところがあらう―。これでみると、彼の成立を目指した言語地理學は、むしろ、言語地質學とよばれる方が本領にふさはしいことがわかるであらう。隨つてそこに地理學的條件、或は地理學的事實とよぶところのものは、單語の互ひに對峙する分布の仕方を意味してゐるのであつて、この狀態は、たちどころに、單語の歴史を物語るものと解されるのである。彼の他の論考も、同じくこの分布の仕方の異同を通じて、單語の發生と消長とをさぐつたものであつた。併し乍ら彼は所謂學問の體系を建てることに夢中になるよりは、常に學問の內容をなす事實に卽した研究のみを發表したのである。言語地理學―以後は言語地質學―を體系づけようとする企が生じるや、なほ諸種の議論が起つたのであつた。

吾々は次にこの論議の主なるものをとり上げて、そこから更にこの學問の本體を覗つめなければならない。以上は、言語地理學の一般の言語研究界に出現してきたのが何によつてであるか、或はそこに如何なる位置を占めるものであるか、乃至は一般に現在理解されてゐるこの學問の概念・對象・任務について概略記し、更にこの學の創始者とその意圖するところをのべたのであつて、それはいはば言語地理學の輪廓を描いたのである。したがつて、以下は、この學問の方法・問題・對象等を更に委しく考察してみよう。

第二章　言語地理學の方法

科學の根本的な理解は勿論所謂方法の問題を中心にして行はれる。しかしこの方法といふ概念は普通二樣に解され

てゐる。例へば、實際的の操作も方法とよばれることがあり、またこの實際的の操作を營なませる動機をかたちづくるものも方法と呼ばれる場合がある。この兩者にあつて、科學の根本的な理解と深く關係するところのものは、いふまでもなく後者に在るのであらう。從つて、後者を理論的方法或は態度と呼び、前者は實際的方法或は手續と呼んで、その間を區別しておくのが至當とされてゐるのである。こゝでは、主としてこの「態度」を問題としていくのであつて、卽ち言語地理學はどんな研究態度を持して、實際の研究手續をふんでいくものであるかを、まづ考察するわけである。

さて、言語の硏究諸部門に於て、「方法」が特に「比較の方法」—從つて、「比較の態度」—と呼ばれる場合がある。この方法は、簡單にいへば、研究の對象たる言語を專ら社會的な、制約的な、傳統的な、從つて歷史的なる所産の一つと考へて、これの歷史を辿らんとする一つの態度と考へられるのである。しかも、かゝる場合にいふ、歷史は、嚴密には、連續を意味するのである。從つて、言語の歷史を辿らんとする—その方向は任意である—態度は、言語の連續を闡明せんとする態度に外ならない。なほしかも、この連續は、事情に從つて、繼續的の場合もあれば、また斷續的の場合もあるのである。

言語地理學は、前章に些か述べた樣に、それが特異の事情に從つて、地方言語事實—特に言語活動を直接示すものとしての單語—の歷史を探らんとするからして、その研究態度はこの「比較の方法」によるのである。

しかし今迄の言語學の仕來りでは、比較の方法は、專ら個定された意味で用ゐられてゐたのであつて、例へば印歐語比較言語學、比較文法等のうちで云はれる場合がこれである。この個定した立場からして見ると、ディーツ(Diez)

ガストン・パリス、ポール・メイエル(Paul meyer)、アスコリ(Ascoli)等がロマン諸語の研究の中に、印歐語の比較文法の方法をひきうつし、卽ちこれをラテン語から發したこれらのイディオムの研究に應用し、よつて特異なロマン比較言語學が成立し、事實上ではこれらのイディオムを構成する現在の地方語の具體的な研究に達し、言語地理學の結成となり、しかも、その間には常に比較の精神が一貫して受け繼がれてゐるにも拘らず、傳統的な仕來りからして、この後者をその前のものと方法論的に切り離して、これを別者と考へ、比較の方法と地理學的方法とに分けておく學者があるのである。例へば先にあげたミヤルデがこれである。果してこの兩者は別々の方法であらうか。

吾々は、まづこの比較方法と地理學的方法を別々に考へるミヤルデにその所論をきいてみよう。彼は、フランスのロマニストが、余りにも無批判に、言語地理學派に投ずるのをみて、奮然として自らロマン方言研究に沒入し、この結果をひつさげて、逆に言語地理學の一面的なることをせめ、ジリエロンの學問を批判し、その意氣は「言語學とロマン方言學・問題及び方法」なる尨大なる一書となつてあらはれたのである。そこにあらはれた、彼の意氣の一端は既にあげて置いたが、彼は次に見える如く、主として文語と俚言上の關係に考察の中心をおいてゐるのである。例へばこれを—∧文語の助けなしでは、俚言の研究に於て、總ては曖昧の域をぬけないといふこと、並びにロマン領域のある定まつた一領域の俗語を研究するためには、そこの他の領域で用ゐられる諸俚言とか、開化語との比較をできるだけひろく行ふ必要があることがはつきりと定まれば、一言にしていへば、若し方言學がとにかく言語學の欲求を有してゐれば、このそれ自體に於て考へられた俚言の研究の利益が何であるかといふこと、及び俚言調査に對する現在の熱狂がどこまで正當なものであるかといふことを、今や自らの心に尋ねてみもできやうといふものである∨と述べ

て、俚言研究の割據主義を難じてゐる。[1] また、これによつても、彼が文語の研究と方言の研究との關係をといてゐることがわかるが、なほ是等を、次の樣にも述べてゐる—〈俚言の研究の利益は二樣である。一方は俚言そのものゝ事實の理論的な說明を可能にすること。他方は、直接にもせよ、比較の方法によつてにもせよ、文語史をあきらかにすること。これである〉[2]と。で、彼は、主として文語研究のために俚言を利用する考へであつて、言語に於ける文語領域と俚言領域との因果の法則の異ることは無視し、一概に俚言研究の結果を文語研究に利用せんとしてゐる。また利用せんとするからには、彼は方言が文語の直接の繼續であるとの說明にいそがしかつたのである。ところで、一應吾吾は、言語地理學派の他方が現在の地方言語事實に對して抱いてゐる考へを知つておかなければならない。

十八世紀の文法家は、標準語と局所方言とをくらべて、前者が時代に於てより古く且つ理智規準に對してより信實を保つものであり、後者は一般民衆の無理と不注意とに基くものと確信してゐた。それにも拘らず、史的言語學の進步は、標準語は、決して最古のタイプを示すものではなくして、特別な史的條件の下で、局所方言から起つたものであることを示した。意見は今や一方から他の極端に移つた。局所方言が標準語に死滅した語形を保存してゐるといふ譯で、これが古代タイプその儘の生殘りだと見做されたのである。かくして、或る邊陬の言語が古代タイプをその儘示すのに、標準語は他の諸方言の混合から成り立つてゐることがわかつたからして、この局所方言の方が、史的な意味で、より正規なものであるといふ結論にまで飛躍したのである。然るに、言語圖卷の出現—例へば獨逸の—は、再び、局所方言は、標準語と同樣に、より古い語形を保存するものでないことを示した。[3] 再轉である。かくして、その後、フランス言語地理學は、ます〳〵、この再轉を確證するのみである。

で、言語地理學者が現在の言語事實に對して抱いてゐる考へは、音韻論的現象にしろ形態論或は單語分布狀態にしろ、原始時代から少しも外的影響を受けない原始の儘のものはなくして、與へられてゐるものは無數の變化を經たものであるとする點にある。逆にいへば、昔のものはなぜ消へていつたか、或はこの消へたものに對する手當はいかにして行はれたかといふ生物學的な觀點に立ち、複雜な變化に處していく點に言語地理學の本領があると考へてゐる。即ち言語地理學者は、諸方言は孤立して生活するものではなく、互に行き來をつゞけて、然も獨自の領域を守らうとする、統一と分岐の二原理に絶えず支配されてゐると信じてゐるのである。單語の生活或はその歷史はかゝる複雜を豫想される單語の生成のいひである。音韻にあつても、ジリエロンは、例へば—〈言語の音韻狀態は、時の流れにつれて、絶えず、つくろはれ、辛じてつぎはぎされた衣服でしかなく、そこには、それの原始の狀態はみぢめな破片としてしかとどまつてゐないことが多い〉と述べて(4)、恰も、この衣服に對する研究は、今や絶望であるといふ口吻を漏らしてゐる。更に驚く可きは音韻輸入の問題で、他の方言からの輸入の音韻が土着の音韻組織の面貌を一變させてしまうことである。現代では全プワトゥー地方は純然たる北佛方言を用ゐてゐるが、曾ては、この地方が南部の音韻改新に加はり、中世期の後期に至つてはじめて北佛方言の影響に門戶を開いたといふことがこの學問によつて示されたのである(5)。して見ると、あるのは變化のみ或は單語は各自の歷史をもつ等の命題は益々その焦點の正しかつたことを證明するばかりである。さて兎に角、現在の言語事實が、昔のそれの、平穩な發展のあとではないとするのが言語地理學の持論であるからして、文語と現在の地方語とはまるで別の因果の法則に支配されてゐると考へるのである。從つて、現在の地方言語事實からして、可成り時代の距つた文語の說明を行ふことは危險を伴ひやすいと、これを嚴

密に考へ含んでゐるのが言語地理學派の主張である。

ところで、吾々は再びミヤルデに立ちもどつてみよう。彼は、さきに述べた樣に、文語と地方語との關係をつけようと試みて―文語事實に中心はおきつゝ―ゐるのであつた。で、〈ロマン領域の俚言を卑俗ラテン語の繼續であるとする傳統的な考へは、ジリエロン、ブローシュ(Bloche)によつて、よびさまされた「口語の活動性」といふ考へと矛盾をはらむものであるか。俚言が進化したラテン語であるとする古典的の觀念に「働く口語」は矛盾するものであるか。口語の絕えざる變化は、つきつめたところで、これらの口語をラテン語によつて說明することを除外するものであるか〉(6)とし、また、〈歐洲ロマンに現存する人類集團の多くが、ラテン時代にさかのぼるものでないこと、從つて、局所的の言語傳統の多くが、精々これらの集團が形成された時の日附をもつに過ぎないといふことは明らかである。しかし、これらの考察が、ガロ・ロマンの俚言をゴールにもちこまれたラテン語の發展の歸結であるとする說を弱めるものであるか。俚言は「基準的口語」とか、「方言」の殘存物なのではないか、或はその殘存物でないにしても、少くとも、これらの「方言」或は「基準的口語」の時と所とに於ける分化の所產ではないか。もし、しかりとすれば、「方言」そのものを說明してかゝらねばならない。しかるに、この「方言」或は「基準的口語」の形成を考へてみると、より直接にせよ或は徐々にせよ、ラテン語までゝはなくとも、共通ロマン語までさかのぼることをさける譯にはいかない。少くとも、近代の口語に對して、眞にその名にふさはしい科學的な說明を與へようとするならば兎に角これらの口語とラテン語とを比較することは全く必要である。口語Aに實在するa^1、a^2、a^3といふ事實とラテン語(L)に實證されるl^1、l^2、l^3といふ事實との間に恒常關係があることを言語學的分析が一再ならず示すのである。…總體を認識してい

くことに對して最も大切なのは、この兩極の $a^1A \dots l^1L$ の關係である。而して中間のものを決定する事は過程の委曲を再構するためにしか有用ではない。俚言A、B、C…が、獨立した組織をとらず、相互に交通するといふことは大して重要ではない—經驗が示すやうに、俚言Aの或る事實とLの或る事實との間には、確かに恒常關係があるのである。そこで、a^1といふ事實が俚言B、Cに移行したといふ假託の下に、これらの恒常關係の方をきめていかないことは學問の目的を勝手に限定することであつて、眞に知らんとする士のとらざるところである〉と述べて、しきりに[7]、言語地理學の本領とするところに反對の說をなし、いつしか、かゝる研究の有力でないことを述べてゐる。〔上に特に注目すべきところには便宜上加點しておいた〕。さらに彼はこの考へを押し進めて、次の樣にいつてゐる—〈今日のロマン語はラテン語からロマン方言に到達した大變化の一瞬間でしかない。この特別の瞬間の研究は總體の研究に密接にかゝりあふ。從つて、ロマンロ語とラテン語との間を細心に比較をすることは缺くことができない。然るに、現代のロマニストは言語の「生物學」を研究するのだといふ假託の下に立つてゐる。これは誤謬である。あらゆる領域にあつて、生物學を照らす、よりよい個有の規準には「古生物學」が含まれてゐた。時の最も大きなひろがりのうへの事實を比較すると、最もよく發展を再構でき、また最もよく新しい變化のあとをたどることができる。……言語地理學には言語生物學がまさに基礎をなす。比較方法は、死んでゐる言語が問題となるとき、ひとり適用されるものである。この方法は、生きてゐる言語の以前の狀態はどんな風であるかといふことが問題となるときに地理學的方法に立ちまさるのである。現在のロマンロ語の地理學は、ラテン語の狀態を殆んど不完全にしか再構せしめるものに過ぎない。この方法はラテン語以前の狀態を再構するには力が不充分である。この方法がもたらすところは—屢々貴重では

あるが—より近代の時期の價値をもつてゐる。地理學は先輩に席を讓らねばならない。比較方法は、時のカテゴリーに於て、ひろがつたカーヴを描き且つ總括な發展を再構することが問題となる場合には全くこの地理學に立ちまさるのである。そして、地理學的方法は補助—缺くべからざるものではあるが—に過ぎない。地理學と史的比較主義とは相互に支へあふものでなければならない〉と述べてゐる。(8)

以上が、ミヤルデの比較方法に對する意見であり、言語地理學に對する批判である。しかるに、吾々はさきに歷史が問題となるかぎり、したがつて、連續が問題となるかぎり、文化科學にあつては、それは比較の方法によると考へてきた。またしたがつて、言語地理學が、例へば現在の單語の歷史を辿らんとするかぎり、それは比較の方法によるのほかはないと考へてきた。ところが、ミヤルデによれば、比較方法と地理學的方法とは別物になるのである。たしかに、前にのべたところであるが、言語學の從來の一部の見解によれば、比較方法はミヤルデの考へるところに近いといへるのである。果して、比較方法はさやうに狹義にとられるべきであらうか。また、ここに注意すべきは、ミヤルデは、この比較方法に對する考へはメイエの考へる比較方法に負つてゐる點である。—(この「言語學とロマン方言學」もメイエに捧げた書である)。とにかく比較方法はミヤルデが考へるやうに狹く解さるべきものであらうか。また、例へばメイエの意味する比較方法の目標はミヤルデの考へるやうに「再構」することに專らあるものであつたらうか。メイエの考へる比較方法の目的は實は「對應」を追求するもので、言語活動の昔からの形の連續を辿るかぎりに於ける再構ではなかつたらうか。メイエが新著の「史的言語學に於ける比較の方法」の一章に「言語地理學」をのせてゐるのは如何なる理由によるのであらうか。〔人も知るごとく、メイエは比較言語學と史的言語學とを分けつゝ且つ兩者

が深く方法論に合致することを說いてゐる」。とにかく、吾々はミヤルデの考へる比較方法と眞の比較方法との間には差異があるのではなからうかといふ疑問を抱きつゝ、更にこれに對して言語地理學派を代表して明答を與へたテラシェの見解にふれてみよう。

で、ミヤルデの「言語學とロマン方言學」(9)が、ジリエロンの學問に對する批判にあつたやうに、テラシェの「言語地理學、歴史及び文獻學」といふ論文は、正にこのミヤルデの前記の書中の見解に對する批判の爲に書かれたものであつた。吾々は、その七章からなるミヤルデへの駁論のうち主なるものをとりあげてみよう。曰く—∧最も重大なのは、全くの誤謬にみちみちてゐて、ミヤルデ氏に本當に次の樣に信じこませ、云はせ、證明させようとしてゐるところの(ジリエロン氏が抱くやうな言語地理學は傳統的比較方法と全くはげしい鬪爭をしてゐる)(10)といふことである。しかし、比較方法と言語地理學との間の鬪爭、眞の鬪爭について、吾々はいささかの跡も見出さないであらう。私は、少くともミヤルデ氏の著書をくまなく、くはしくその證據をさがしまはつた—眞の證據を一つの鬪爭の—實際の鬪爭の—この兩方法の間の、みつけ方が盲目的なのか？ だがしかし、私はいささかも、例へばメイエ氏が定義し且つ行ふやうな比較方法とジリエロン氏が考へ且つ行ふやうな言語地理學との間に明白な對立或は矛盾を見わけることはできなかつた(11)∨…∧傳統的比較法と言語地理學との間にはミヤルデ氏が考へるところの對立はない(12)∨…∧ミヤルデ氏の精神に於けるほかには、常にこの鬪爭はないのである∨とのべてゐる(13)。この點について、以下いささか實例によつてミヤルデとジリエロン、テラシェの見解の相違するところを見よう。さて、その資料は等しくフランスに於ける「蜜蜂」の地方的稱呼についてであつた。「蜜蜂」の方言は、元來はこのガロ・ロマンの領域で、二語で、卽ち北部は apis 南部は

apicula であつた。しかるに、「フランス言語圖卷」の「蜜蜂」の地圖をひらいてみると、現在北部では僅かに四地域にしかこの apis が行はれてゐるにすぎず、しかも北部の他の領域では別に混然として ef, avette, mouchette, mouche á miel, mouche, ruche, essiam, essette 等の語が用ゐられてゐるのである。反對に、この地圖は南部では今なほ apicula がひとり頑張つてゐることを示すのである。

さて以上の分布事實を中心にして、問題が二つに別れていつたのである。第一の問題は、ミヤルデが、今北部に僅かながらも apis の殘つてゐるからには、曾てはここにも南部形の apicula があつたに違ひないと考へることについてであつて、ミヤルデは、次の樣にして北部にこれの存在までを再構したのである。

(1) auris (耳) : auricula (左の縮少形)
(2) geni (膝) : geniculum (左の縮少形)
(3) navis (船) : navicula (左の縮少形)
(4) avis (鳥) : avicula (左の縮少形)
apis (蜜蜂) : $\sqrt{\text{apicula}}$

即ち、ミヤルデは、(1) (2) (3) (4)…等の對應からして、北部に apis が殘存するからには、曾ては對應する apicula がここにあつたと推定するのである。しかるに、斯樣な場合に於ける言語地理學派、特にジリエロンの考へ方は簡明で、無いものは無いとする。即ち北部には apis が僅かの遺存形としてのこつてゐるのに反して、apicula はそこには、遺存形としても、少しも出てこないからして、北部には apicula といふ形は元來全然なかつたとするのである。

まづテラシュは――〈ミヤルデ氏の比較主義は北部ゴールに apicula を措定し、ジリエロン氏の言語地理學は北部ゴールに apicula を否定する…〉とのべてゐる。[14] さて、第二の問題は、北部に實證された語形についてであつた。で、ミヤルデが力瘤をいれたのは、ef を apem にさかのぼらせる事よりもむしろ ef の連續をその他の諸形のうちに追求した點である。吾々は、ただラテン語の apem が北部ゴールで ef どころか é にまで縮少され、所謂「音聲毀損物（ミチユレフオイチク）」となつたので、これを救ふために手あたり次第に飛ぶ蟲のうち一番目につきやすい蠅 mouche といふ語をそへて出來たものから mouchette といふジリエロンの考へをふくんでおいて、さて apem, ef, avette, mouchette, mouche á miel, essette 等の語形をよく注目してみる必要があるであらう。テラシュは、かういつてゐる――〈あたへられた ef をミヤルデ氏の比較方法は、apem にさかのぼり、言語地理學は、反對に、この語がうけた言語、時及び所にしたがふ變遷、即ちすべての分岐の方に下つていく〉[15]…〈今や、吾々はミヤルデ氏の考へるやうな比較主義とジリエロン氏が實行するやうな言語地理學とが、どこにわかれるかを知る。で、元來この兩方法は少しも角をつきあはすものではなく、この兩方法は少しも拮抗するものでもない。そして、いかなる素振りにもせよ對抗するものではない――ミヤルデ氏が傳統的比較法とよぶところのものは、統一的・上昇的比較主義であり、言語地理學は分化的・下降的比較主義であつて、その出發點ははつきりと定まつてゐる〉とのべ、[16] 更に比較方法が元來ミヤルデが考へるよりも廣い領分に渉るとして、〈ミヤルデ氏は比較方法の諸原理はメイエの「印歐語比較研究序說」によつて嚴肅に示されてゐた。比較文法は、それがラテン語から出た諸イディオムに適用されたとき、即ちこれらのイディオムの音韻的形態的及び統辭

的對應をかたちづくること及び原始共通語形を再構しつつ、これらの對應を說明することに成立したとしてゐるが、—否それは單に半分である、比較方法の上昇的の半分である。メイエはこの「印歐語比較言語學序說」そのものの第一版の序言のうちで(これにミヤルデ氏はよつてゐるのであるが)—全く反對し、次の樣にいつた—〈比較文法は、印歐語を再構成するのが目的ではなくして、諸對應によつて指示された諸共通要素を決定することによつて、史的に檢證された諸言語の各々に於て言語の古い形のいままで連續してゐるもの及びそれの獨自の發展に屬するものを明瞭にするのが目的である〉(17)と……そこでジリエロン氏が ef には apem の名殘りがついで、avette, mouchette, mouche à miel, essette の中には ef の殘存があるといはうとするとき、氏は全くメイエ氏と同意見である〉(18)とのべてゐる。以上の論爭に對して、吾々はテラシェの所論の正當なるを認めざるをえない。隨つて言語地理學と比較言語學とは將來とも次の關係に立つであらう。卽ち—

言語地理學の方法は、比較の方法を演繹風に用ひていくものであつて(19)、この研究態度は從來等閑視されてゐたが、言語の歷史を確實に探求せんとする場合には、決してこれをうち棄てゝおくことはできないのである。所謂比較言語學は、その研究に資する材料の條件の不齊一からして、言語活動をさぐらんとすることに對しては常に髀肉の嘆を洩らしてゐたが、同じく比較の方法をとる言語地理學の出現によつて、はじめてその缺を補ふことができたのである。このふたつの學問は、從來の行きがかりをすてて、兩者相提携することによつて、ひろく書契に先き立つ時代から、書契以後現在に至るまでの活潑なる言語の歷史を闡明することに力をつくすことができると考へられる。

註

1 Millardet, Dialectologie, P. 101.

2 同前、 P.108.

3 Bloomfield, Language, P. 321

4 Jules, Gilliéron, Faillite, P. 95

5 Gamillscheg, Sprachgeographie. S.' 70

6 Millardet, Dialectologie, P 81.

7 同前、 p. 8.1

8 同前、 P. 88-99

9 Adolf Terracher, géographie linguistique, histoire et philologie, Bulletin de la société de linguistique de paris, 29. 1924. P. 259-350. 以下 Terracher, géographie linguistique とす。なほ同氏の「言語史と言語地理學」は雜誌「方言」第二卷、第一號、及び第二卷、第三號に吉町義雄氏の譯所收あり。

10 同前、P. 302.

11 同前、P. 306.

12 同前、 P. 806.

13 同前、 P. 322.

14 同前、 P. 332.

15 同前、 P. 334.

16 同前、 P. 325.

17 A. Meillet, Introduction a l'étude comparative des langues indo-européennes, 5, 4.
18 Terracher, Géographie linguistique. P. 308,
19 同前、 P. 302

第三章　言語地理學の問題

言語地理學は眼前のいかなる言語現象もそれが昔から少しも外的影響を受けないものはないといふ假定から出發してゐる。云ひかへれば言語地理學は音韻論的現象にせよ形態論的現象にせよ或は語彙論的現象にせよ、とにかく現在の言語現象が示す性質は二次的で、卽ちそれらには、各々幾つかの先立つ現象が存在すると考へ、たゞその學問の性質からこれを單語分布狀態から證明につとめるのみである。周知の如く吾々は完全なる言語的統一に出會ふことはない。或る瞬間の自己の肉體的或は精神的の狀態や話の運ばれる場所に從つて示す別々の話し方はしばらく措き、同じ人にしても一事物に對して異る幾つかの名稱を知つてゐる。又異る世代の間にも同じく幾つかの名稱が同一事物に對して誤解を生ずることなく用ゐられてゐる。對話者の關係に從つて繰り出てくる名稱もある。これらは言語の實體が完全なる統一どころか、全き多岐である事を示す。而して言語の多岐性はその言語の經た諸改變を示す。言語地理學は地圖に示された多岐な單語分布狀態からして、それが經た幾度かの改變とその經路或は原因を探り、說明しようとするのである。その都度生じる問題は極めて多いが、これをひとまづ外的問題と內的問題とに大別し、更にこれらの問題は言語地理學の種々の別名—言語製圖學・言語地質學・言語生物學—のうちに特徵的にあらはされてゐるから、

それらを順次考察してみよう。

A 外的問題

言語製圖學 さきにジリエロンが地圖の研究を以て言語地理學をはじめようとした點について一言したが、言語地圖とこの學問との關係は先づ第一に深い。メイエの巧みな言ひ方を以てすればこれは次の樣に云はれる。「調査の結果を一つ一つの事實についてそれぞれ別の地圖に書き表はして行く事が出來るといふ一事だけでも仕事は容易になつてゐる。我々は統計學が圖表を伴ふやうになつてから非常に明晰になつた事を知つてゐる。一枚の地圖の上に、或は繋ぎ合して觀る事の出來る二三枚の圖の上に、一個の問題に關した事實を見ることが出來れば、その解決の本質的な要素は立ちどころに言語學者の目前に與へられるであらう」（史的言語學に於ける比較の方法、一九十二頁）。この言語製圖學は云ふまでもなく全く機械的の作業であつて、別にさしたる問題も起らぬであらうが、假に調査地點を多くとる場合には、同形にしろ異形にしろ多くの解答を地圖に記入せねばならなくなるが、この際は「ドイツ言語圖卷」の樣に、これらの形に對して豫め一定の符號をきめて置いて、これを各々その解答を得た地點のところに記入することが便宜であらう。更にこれ等の形を系統別にして色彩を以て示すことも一大戰以前の「フランス言語地圖」の如く一他との關係を明らかにさせるし、又、都市或は地方文化の中心、河川・山脈等も薄く表はして置くことも必要である。いづれにしても、これ等は地圖記入の問題であるが、この地圖に記入された全體の語形の配置關係を讀み、解譯して行かなければならない。これによつて次の主要な問題が起つて來るのである。

言語地質學 ここに於ては以上の地圖の讀み方が問題となるのであるが、まづ單語の分布と單語の分布狀態の間の

區別を明らかにしておかねばならない。前記の如く地圖の上に漫然と記入されてゐる場合はこれは單語の分布にすぎない。これに反して、既に幾度かふれてきた如く、言語地理學はこの分布の相互の關係を結びつけて行かうとするものであつて、この態度に導びかれる限り、同じ分布も分布狀態として解されて來るのである。言語地理學は、一般の地質學が地球の過去の諸時代に於ける歷史を、岩石と岩石中に含まれる化石の硏究によつて明らかにしようとする如く、言語の過去の諸時代の歷史を現在の單語の分布狀態の觀察によつて明らかにし、何故現在のこの不統一な狀態に到達したかを闡明しようとする。卽ち地質學者が種々の鑛物の現在の成層からそれらの間の昔の關係に斷案を下さうとする如く、言語地理學者も現在の單語分布狀態から、それらの間の往昔の關係を解決しようとするのである。從つて、言語地理學に對する單語の分布狀態の價値は極めて重大である。

この分布狀態を解譯する原則には次の如きものがある。

一、同一の事物(或は概念)に對する若干の稱呼を比較してみて、或る稱呼が他のものに對して孤立した分布狀態を示す場合は、これの孤立の分布狀態にある稱呼の方が他のものに對して時代が一層先立つものである。

二、(一)の場合は具體的には應々中央內側面と外側面の關係で示されて、外側面をなす稱呼は內側中央面をなす稱呼に比して時代が一層先立つものである。

三、(二)の場合に於て、逆に分布狀態からみて外側面をなす稱呼より內側面をなす稱呼の方が時代が一層先立つものもある。

四、一つの廣大な面の內に小さくポツリとあらはれてゐる面をなす稱呼はこれをとり圍む面をなす稱呼より時代

が一層先立つか或は反對にそこに新に偶發してきたものである。

以上の四つの原則は實は互ひに關聯してゐるものであるが、(一)は分布面を比較した場合にこれの新古を一般に知る原則であり、(二)・(三)は、(一)の具體的な場合を示し、(四)は他に比較する面のない全く孤立の面で、これを所謂面を殘存形と解するか、或は前兆形と解するかに從つて、それをなす稱呼の發生の前後を轉倒させてしまふものである。

さて從來言語地理學が努めて說いて來たのはこのうち(二)の形を重要視すべきことであつて、ジリエロンの諸種の理論もこれを根幹として轉回してゐるのである。例へば、彼は「木材を挽く」といふ概念に對し、南フランスで、全く互ひにかけ離れた五つの地點に serrare といふ語が用ゐられてゐるのをみてとり、しかもこれが丁度フランス語の源をなすラテン語に於て「鋸で挽く」といふ意味を示すものであるからして、この語がラテン語の直系をひくものと解し、著名な次の意味の斷案を下したのである。—この serrare といふ語がかけ離れた五つの地點に散發的にあらはれてゐるが、これが昔から今に用ゐられてゐる單語と解するか或は近頃偶然に斯樣に生じた單語と解するか、いづれにしてもこの二通りの解譯が出來るが、若しこれが近頃生じた單語であるとすると、丁度新しい文化物が到來した場合にそれと共に新名稱が這入りこんでくるのと同樣にして、これが五つの地點に表はれたものであると解されよう。しかるに、この語はラテン語にみあたる古風なものであり、且つ人の昔から行ふ「鋸で挽く」といふ動作を示す動詞である。從つて、斯樣な重要な動作を表はす語を全然有さなかつたとか、或は有したにしてもそれを一旦失つたとしたところで、新に、この語—しかもこのラテン古語風の—を生みだすとか、又はこれが再生したと考へることは出來難

い。そればかりでなく、又この語が地理學的にも言語學的にも全く別々な五つの地點に時を同じくして產れたり或は再生することは絕對に不可能である。從つて、この「鋸で挽く」といふ同一の動作を表はすためにこのラテン語が雜然と這入りこんできて、それが偶然點々と分布したと考へる事は全く出來ない。これに對する結論は、卽ち現在かけ離れてゐる五つの地點はたゞ一つの領域を形づくるものであつて、換言すれば、これらの現在殘存した五つの小島の間をいづれも結びつけて考へてみなければならないのであつて、一言をもつて云へば現在これは五つの殘存形としてちぐはぐの樣子を示すが、その以前にはこれらを結びつけて得られる中間の地方も等しくこの語を用ゐてゐたのであつたと考へたのである。さてこの殘存形を重要視した說はさきの例へば(二)の原則に當り、serrare のこの分布狀態はこの場合では外側面をなすものと考へられる。この說は全く正しく、この外側面をなす語に對し、他方現在內側面をなす他の稱呼の方がより新しいと云ふ考へが含まれてゐるのである。この serrare と同樣なのは「多く」を表はす場合の multum である。卽ち「フランス言語圖卷」にはこの「多く」を現はす稱呼として multum のほか、brauement, grantment, tout plein, en masse, bien, fort bien, hardiment, joliment, fort, force, gros, grossement, plat, beaucoup 等々が載つてゐるが、一つの multum 地帶と他の multum 地帶との中間地帶にはほかのこれらの語形が分布してゐるからして、この multum が最も古い稱呼で、他の中間地帶の稱呼はこれに比して時代が新しいものであると考へられるのである。卽ち丁度ラテン語形のこの multum は昔全佛に涉つて分布してゐたと解されるのである。從つて言語地理學は、一事物(或は一概念)に對する諸種の稱呼は相繼いで生ずるが、しかも最初の稱呼は完全に失はれてしまふことはなくて、領域の某々の隅々に保存されてゐて、たとへ元のまゝの形でなくとも派生語として

なり、とにかく言語の中にその跟跡を殘してゐると考へ、今日並存してゐる諸語の間に地質學者が行ふ樣に繼起的の關係と、從つてそれらの間に一次、二次、三次……と比較的の年次を探し出して行かうとするのである。卽ち言語地理學の最も重要な論證は、この分布の面の繼續の原理であつて、今日全く斷片的に見える面を共に繼續あるものと考へ、更に別の言葉を以てすれば、現在別々の樣相を示してゐると見える各方言が、事實は互ひに深い連帶關係を結んでゐると考へる點である。又斯樣にしてこの分布の面の繼續の原理卽ち他の言でいへば各方言が孤立して存在するものでは無くして、相互に連帶關係を結んでゐる點を認める場合には、何等かの意味で各方言は互ひに孤立し存在すると考へること、すなはちその第一の標識としての方言區劃の設定は理論的には考へ難くなる。

また以上の如く分布面の繼續とそこに比較的の新古の年次を承認し又各方言の間の連帶關係を認める場合には、反面に所謂「單語の旅行」とこの「旅行の出發點」といふ考をまづ考慮しなければならない。卽ち、槪して一地點の一事物(或は一槪念)に對する稱呼は、それを用ゐる個人が他の個人と交渉を保つ限り、他の話者の氣にいれば、ここを中心點として遠く次々と傳播して行く。これが「單語の旅行」であり、又いふまでもなくこの場合の中心點がその出發點である。しかし場合によつては、この平穩な「單語の旅行」は少し荒く「移住」或は「侵入」とも云はれねばならない。言語地理學は單語を土地に結びつけて、そこには平和な旅行もあれば、止むにやまれぬ移住もあり、更に爭鬪も行はれること、丁度社會生活を營む個人と同樣であると考へてゐる。單語は平和的にしろしからざるにしろ斯樣な旅行を續ける。更にさきの一地點に於て一事物(或は一槪念)に對する稱呼は、そこに時の經過が加はれば、何等かの動機によつて、他の新稱呼によつて次第に代られてくるのであつて、この新稱呼はまたさきの場合と同じく第二、第三……の出

發を遂げ、かくしてこれらの旅行・移住・侵入が次々と行はれ、單語はこの出發點を中心として外に押し出ていくのである。で、例へばさきにあげた multum, serrare の如き現在の分布のうちの最外側面的稱呼は、それぞれ以上の旅行の第一次の出發者を意味してゐる。たしかに言語地理學的研究には、この最も外側面の決定は興味もあり又重要でもあるが、他方これを對應的に決定する場合の內側面の價値も勿論看過できない。更にこの現在の內側面のうちに或は現在の外側面形の落こぼれが有るか否かは―ここを嘗て外側面形が通過したに相違ないから―一應是非たしかめておかねばならない。もしこの落こぼれがここに在れば、これによつて現在の外側面の經歷が益々明瞭になつてくる筈である。いづれにしても言語地理學はこの外側面と內側面と絕えず同時に考量し、又これ等が、內部的に深く關聯してゐるものとし、一つを顧慮せずしては他を說明することは出來ないと考へ、換言すれば單語の分布狀態の全體的の研究を常に目睹してゐるのである。

以上は一地點から時代を異にするにつれはぢまつた單語の旅行とその經過を述べたが、云ふまでなく單語の旅行の出發點は數しれず、これを豫め算出するわけには行かない。言語地理學的調査が領域を廣くとつて行はれねばならぬ所以もここに原因してゐるのであつて、かくする事によつてのみ言語の多岐性の內實を探りうるのである。又この言語の多岐性はひとり言語の改變の標識であるばかりでなく同時に斯樣な多くの單語旅行の交涉の結果であるから、この旅行の過程を常に考慮せねばならない。この多くの交涉は先づ接觸からはじまる。從つてその接觸がいづれの方向から來たかを最初に探らねばならない。某地點から某々地點へ侵入したといふ樣な事實上の方向はしばらく措き、一般的にこれは鐵道、主要通路に沿つて文化的・社會的に高い方が侵入して行くと考へられる。これは丁度更に大掛り

な國語と他の國語等の間の借用の場合と等しいのである。また興味があり、今後の研究の課題として注意しなければならないのは、この接觸が如何なる言語現象を惹き起すかである。何となればこのうちにさきに左袒するを一時止めた方言區劃の設定に對する解決點が見出されるかもしれぬからである。接觸は一般には先づ、語形の所謂複合現象を呈する。例へば南フランスで「壺」を示す語として ourlo といふ語形が行はれてゐる。しかるに、この語形が行はれる地域の左右の領域では同じく「壺」を示すに oulo と ouro の各々に截然と分かれてゐる。少しく注意すれば解る樣に、ourlo はこの oulo と ouro との複合語形であつて、しかもこれがこの兩者の分布地點を分つ要素となつてゐるのである。又「投げる」を表はすに rucher といふ語形が行はれてゐるが、これは如何なる努力によつても語史が解らなかつた。しかしこの地領を挾んで同じ意味で ruer と arocher とが行はれてゐる。rucher はこの二つの語形の複合を示し、兩地域の接觸をあらはす過渡の語形であつたのである。以上の如くこの複合現象を示す語形を有する地點を挾んで別々の語形を有する地點が存するのであるからして、この複合現象はたしかに方言區劃の標識となる。然し、普通この現象は別の言葉で云へば二つ(或はそれ以上)の中心を發した語の衝突或は接觸の結果である。從つてこれが方言區劃の標識となれば、かゝる區劃を設けるには、常に或二つ(或はそれ以上)の中心勢力を豫想せねばならない。方言が偶々かゝる過渉を示す複合現象を呈さずに、例へば左右二つに截然と分かれ―理由は恐らく言語的なるもの以外に在るであらうが―互に一線を劃して對峙・平行する場合もあるが、この場合にもこれが二つの中心勢力の遭遇によるものではないかと考へてみる必要がある。假にこの全き一線を中に挾んだ右と左とを考へると、かゝる對峙はまづ右から昔の或る時代に發した現象が現在は左にとどまり、次の或る時代に同じく右から發した同一事實に對す

る新しい現象が現在の右にとどまつてゐるのか、卽ち右を出發の中心とすると現在の左が外側で、現在の右が內側と解する場合が一つと、その他は逆に左が或る時代の中心で、現在の右は昔の左で、現在の左は更にこれに遲れた新しい左を示し、卽ち現在の右が外側で左が內側と解する場合が一つと、それにさきにあげた樣に、左右の二中心を認めて、これらが各々四圍に波行するにつれ、偶々その四圍の一側で遭遇し、現在の一線によつて劃される狀態を示すのではないかと考へる事も出來る。方言の區劃にはいづれにしても中心勢力の存在を明らかにせねばならぬ。同じ言語現象內―例へば語法―で遙かなる左右の一致とこれとは別に且つ同時に中央に於ける左右の對峙が見あたる場合には前者の生じた時代の中心がいづれか一つであつた事を示し、後者が生じたのは旣に二つの中心勢力が存在して、その各々からの出發の偶々の遭遇と解されるであらう。いづれにせよ特に一線を挾んでの左右の對峙は、先づ例へばその右の現象の分布が何處まで及ぶものか、或はその左が自己の勢力範圍を何處まで擴げてゐるかを調べねばならぬ。卽ち一度この一線を挾んでの對峙を說明するに先立つて、各自の範圍とその範圍全體がどこまで及びそれが又如何にして生じてきたかを解決して後にのみ相互の對峙の說明が可能になる。

以上の如く、二つ(或はそれ以上)の中心を認める場合には所謂各方言の何等かの意味の獨立的存在を認めるわけになる。で、方言の存在には丁度その中心勢力にあたる所謂 Kernlandschaft の存在を認めねばならない。この語は單に中心地方或は核心地點の意味ではなしに、言語地理學或は方言學の用語として、簡單に云へば方言色の最も濃いところといふほどの意味に解さねばならない。

方言 (Mundart) とは、一領域にすきまなく近隣の方言と異る言語現象が行き涉つてゐなくとも、とにかくその領

域の一部にかゝる言語現象をすつかり備へた核心地點を有する樣な一領域の言語であるといふ意味をガミルシェーク は述べてゐるが とにかく斯樣な言語現象を最も濃く備へてる地點の意味で核心地點といふ用語は用ゐられ、これが あつてはじめて個々の方言があるといへる。

以上の如く言語地理學の外的問題は採集された事實を地圖に記入する仕方と、この記入されたところの觀察から生 じる以上の如き問題を含むでゐる。

B 內的問題

言語生物學 言語地理學は上に述べた如く、先づ統計學的見地に立つて、地圖の上に現はれた現在の語の分布狀態 を硏究して、いくつかの繼起的な語床を掘り起して來るばかりでなく、何故語がかゝる多岐な狀態に到達したか、た とへばそこに時・所・人の力の影響が介在する事が判明しても、これ等が事實上は如何に働いてゐるものであるか、 卽ちある言語活動に於いて現在の狀態に達するまで行つた語の爭鬪に際して支配する內部的條件は如何なるものがあ るかを明らかにすることが問題となるのである。

さきに擧げた serraro を再び取つてみよう。この語は南フランスのかけはなれた僅か五地點に行はれてゐる丈で あるからして、現在の「鋸で挽く」を意味する他の多くの稱呼に比して最も深く埋沒した分布狀態を示すものである。 しからば、この語が昔は廣く行はれてゐたのに何故か樣な狀態に立至つたか。解答は次の樣である。卽ちこの「鋸で 挽く」を表はす serraro に對して偶々「閉ぢる」を意味する語が同じく serraro と云はれたからで、同じく動作を表 はし、等しく日常生活に用ゐられる兩語が同じ音である事はいかにも不便であり曖昧であることからして、「鋸で挽

「くの方の serrare が南フランスの大部分から退却し死亡し、遂に五つの殘壘をのこすにすぎない現狀に到達したのである。しかし「鋸で挽く」といふことは何か他の語で言ひあらはされねばならない。そこで南フランスでは serrare（閉ぢる）に對して音韻的に曖昧でない secare, sectare といふ語が誕生して來たのである。このいはば語の病理と治療、死亡と誕生を主な研究の對象とする場合に言語地理學は言語生物學と呼ばれるのである。又言語生物學の課題はここに見られる如く、二種に大別されるのであつて、一つは語の滅亡問題と他の一つはこの滅亡語に對する補充語の作製問題で新語の作成もこれに伴つて生じる。

たしかに、社會の諸種の制度、習慣の變動、即ち大小の文化史的潮流に伴つて言語にも變化が生じ、語の滅亡も起る。しかしながら言語地理學が明らかにしたところによれば、その主原因は、丁度さきに一言した serrare の場合にのべた樣な單語間に同音異義性が生ずることにある。言語が人と人との通達を計るものである以上、そこに用ゐられる記號と概念、語形と意味との關係が明瞭なるを要する。

しかるにたゞ一つの記號で二つ（或はそれ以上）の概念が示される場合、即ち語の同音異義性はこれに逆く。いくつかの語が音を同じくして意味を異にする場合にそれに生ずる衝突によつて、その一方の語が傷つき、遂に斃れてしまふ。衝突が更に激しければ、双方の死亡が生じる。語の滅亡はかくして行はれるのである。

しかし語が同音であればそこに必ず衝突が起つて、その結果としての單語消失を惹き起すとは限らない。混同はむしろ同音のほかに例へば同じくこれらが日常親しい動詞であるとか或は同じ社會層から用ゐられる名詞であるとか、いづれにしても同音異義が單語の消失を起すのは同じ音の單語が同じ統辭論的機能を有し、同じ社會層によつて用ゐ

られる場合である。さて言語の通達欲をさまたげるこの同音異義性が語の滅亡を起す主原因であるが、しからばこれは如何にして生じるかが問題となる。再び言語地理學が明らかにしたところによれば、この同音異義性は音韻發展の結果である。單語の滅亡は從つて多くは音韻變化の激しく行はれる領域で生じる同音異義性によつて惹起してゐるのである。

以上單語が純言語學的動機によつて滅亡する場合を述べたが、かゝる際にはどうしてもそれに對する補充語が必要となつてくる。即ち方言話者がなにか言語通達上の障碍にぶつかると、これを打開する手段が講じられる。例へばフランスのプワトゥー方言では「砥石」と「長い尾」とが音韻發展の結果等しく ko と發音されてゐるが、この同音異義をさけて行くに次の三つの方法によつてゐる。

1 日常佛語からの借用

2 近隣方言からの借用

3 この二つのホモニムの關係に在るうちの一方になにか別の語を加へて區別を立てること。即ち例へば ko à aiguiser と à aiguiser を加へて「砥石」をあらはし、他方「長い尾」の方はもとのまゝの ko であらはす。

さて、この(1)にあたる所謂文語とか標準語からの借用に對して近隣方言からの借用は稱呼が特に田舍生活に關係する場合である。また(3)のなにか別の語を附加して區別を立てる方法は à aiguiser の如く明確な語を加へて行くばかりでなく、所謂指示辭等の小辭を加へたり、或は語音の一部を變更してする場合もある。

又話主は自分に納得できるもののみを滅亡から救ひ出さうとするから、ここに話主の廣い精神活動があらはれてく

る。この活動のあらはれは民衆語源で例へば「鎖す」をあらはすフランス語の fermer は他の多くの同音異義の語との衝突によつて一旦は滅亡したが、鎖すものとして最も多く用ゐられる錠と更にこの錠をつくる鐵 (fer) を考へ、即ち fermer にふくまれてゐる fer- は「鐵」と關係があると考へて再びこの語の存在を確實にしたのである。

又フランス語で野薔薇は églancier といはれるが、これの語源感は薄れてゐる。更にこの語に對して aglantier, arglantier 等の語形が行はれてゐる地點では全く自由な語源解を下してゐるのであつて、丁度、團栗を agland と云ふ地點はこの野薔薇の aglantier を「團栗持ち」と解し、arglantier の用ゐる地點では、野薔薇の枝が弓形に彎曲するところに着眼して、虹が arcenciel (arc-en-ciel) と呼ばれるのを聯想してこれに「虹」の名を與へるのである。即ち野薔薇は或は團栗或は虹と新命名されるのである。この民衆語源の作用は言語地理學によつて單に單語の滅亡をとゞめるばかりでなく、單語を音韻法則外の形にまで拉致してしまふこと、即ちこれが言語變化を規定する最も重要なる要因とされるにまで至つた。外部的の影響、例へば音韻發展によつて混亂狀態を示すに至る言語は再びかやうにして補強作業を行ふのである。斯樣に滅亡する舊語に對して、その一部に音韻的或は語形的の變化を加へたり、或は明確なる一語を添加したりして補充語をつくり出すほかに、全く舊語と無關係に新命名を下す場合もある。この場合にはいはば件の事物(或は概念)の舊語とは別な特徵を捉へてくるのである。例へば野薔薇に對する舊名稱は一般に樹か幹か、葉か花かに特徵をさがして、これによつて命名されてゐたとすると、更に色と實とかに特徵を求めて新命名を下す如きである。即ち補充語をつくるにあたつて、語音變更・形成手段・添加手段等がすべて利かない場合とか、或は文語・標準語又は近隣の方言に借用を申込みたがらないか或は借用出來ない場合に言語は上述の如く命名の對象のう

ちに新特徴を探して稱呼を與へ、更に舊稱呼と意味的に近い一語を利用して新語をつくつてくる。この後者は例へば「砥石」を問題とすると、新に語は「研ぐ」といふ動詞を基礎としてつくられる如きである。

以上滅亡單語に對して補充語の如何にして求められるかを述べたが、元來これに對する一般的原則をたてることは出來ない。これらは方言を異にするにつれてまちまちで、その樣式は表示すべき意味とか、方言自身の生活力とか或は話者の獨創性とかに依存してゐるからである。

結　語

言語の研究者がその對象の本體をより明らかにしようとするにつけて、種々の新しい研究法があらはれて來るのは他の科學と全く等しい。言語地理學もその名稱の當不當はしばらく措き、少くとも言語の新研究法の一つとして有力なものである。これは從來の文獻のうちの言語資料を中心とした研究の比較言語學或は史的言語學と對立するものではなく、むしろ研究の資料の在所を別に探し求めた結果、これ等從前の學問のそのまゝの生長を示す一方法である。驅使する資料の豐富さは更に從來氣づかれなかつた言語生活の蔭影を浮び出させて、多くの寄與を一般言語學に與へてゐる。言語地理學はとにかく新方法と新傾向を確保し、從前の研究によつて見出されてゐた諸原理を更に擴大し、强固なものとする。又この新科學は起りからして專ら單語史の研究を目的とし、勿論以前とておろそかにされてはゐなかつたが、この樣相では熟考されなかつた單語の旅行・移住・侵入と、その途次に生ずる遭遇・衝突・爭鬪、即ち一言でいへば言語改變の跡を地圖に記入された現在の分布狀態を觀察し、比較し、更にそれらの改變を惹き起した內

部的の條件を明らかにしようとする。又近い關係にある方言學に對しては、その觀察の對象は少くとも、その視野を擴大し、資料の比較に中心をおくことによつて、更に詳密なる決論をひき出し、方言學によつて嘗て豫想されてゐたところを實證し或は豫想もされなかつたところまでを明らかにしてゐる。

言語地理學は現在の言語事實の不統一が偶然の結果ではなくして、過去の諸種の力の作用によるものとし、これを地方言語事實に頼つて何故現在の狀態にまで立至つたかを明らかにしようと努める。又例へば異論はあるにしてもヤーベルク、ガミルシェーク、ヘルマン(Hermann)、ブルムフィールド、ミヤルデ、ピザル、ドーザの主張し或は實證する如く、時には言語地理學は現在の資料と過去の文獻に現はれたところとを合はせ考へて、史料を有する以後現在に至る言語變化を明らかにするばかりでなく、ここに見出される諸傾向が史料を供さざる以前の言語生活に在つても同じく存在したとして、所謂先史時代の語形をつくり出してくる場合もある。この方面ではヤーベルクが實際上の功績をあげて、これを史的言語地理學とよんでゐる。史前にまで溯るにせよ或はその以後のみを降るにせよ、言語地理學が言語の史學の態度を持することは動かぬところである。

他方言語地理學は具體的なるものの領域に關係してゐる。卽ち社會的事實をあきらかにするに價値あるものを重要視し、從つて單語の歷史と物の歷史とを常に結びつけて硏究してゐる。

終りに臨んで更に一言しなければならぬことは、この言語地理學的硏究法を統一ある一國語內の調查に用ゐるにとどまらず、これと異種の國語或は民族語等に倂せ適用し、卽ちこれを現在の世界の言語の調查法として用ゐる案をメイエが提議してゐることである。提案の次第の大要は次の樣である。

文化の進化は自づと弱小の人間の群によつて用ゐられてゐる言語を除去するに至る。同様に、同じ類型の種々の方言が用ゐられてゐるところでは、中央方言が普及し傳播して皆の者の言語となる。斯様に言語及び方言は不斷に消失する。而して現在ほどこれが迅速なるはない。しかるにこれ等の消失に瀕する小群の言語、或は地方語は言語活動の歴史を可能である限り過去に溯らしめる左證を供するのである。人も知る如く、比較方法は言語は歴史附けをなさしめる唯一の方法であり且つこの方法は自由にできる左證の數が多ければ多いほどまたこれらが互ひに分明であればあるほど益々好結果を産みだす力がある。言語が例へばタスマニア、オーストラリア、アメリカ、コーカサス、シベリアの方言の様に蒐集の不備・不足のうちに消滅してしまふことは、言語學に對して取りかへしのつかぬ損失である。同様に歐洲の一國の一方言が、その方言の特徴を正確に載せられないうちに失はれてしまふことは印歐語の歴史の一頁が永久に失はれてしまふことに他ならない。斯様に言語が急速に變化する場合に世界の總體に及ぶ言語學的調査を企て、これから比較によく利用できる所與をひき出して來るやうにすることは急務である。さてこの企劃が成功するためには調査は略式ではあるが、また唯一のものである方法の助力をかりねばならない。この方法とは或る數の地點に於て小數の調査者が調査を質問簿によつて行ひ、また言語地圖の作製を最終目的とする方法である。歐洲の既刊の圖卷はこの方法の有力をいづれも物語つてゐて、この方法は細部の改正は措き、今ではその適用を次々へ移すことのみが殘つてゐるのである。從つて余はハーグの第一回言語學大會(千九百二十八年四月十日—十五日)に對して、全世界に渉り且つ最初の世界言語地圖をつくることを目指す質問簿による組織的な調査のイニシヤチーヴをとることを提案した。討論ののち、會議は次の決議案を採擇した。

（一）世界の言語學的狀態は科學的欲求を滿たすに甚だ不充分である。多くの言語及び方言にして一路消滅の路を辿り且つ何等採集さるることなく消滅せんとする危險に瀕せるものがある。

（二）國際會議は會員の滿場一致をもつて、すべての政府がその管下のすべての國々の言語及び方言の出來うるかぎり完全な研究を企てることを當該諸政府の義務なりと信ずるものである。

（三）これに對する簡單にして且つ手ばやい一方法は、調査さるべき領域の若干の地點に、これらの各地點の方言に飜譯さるべき一卷の質問簿をそなえた若干の調査者を送くること、これである。この調査は採集されたる言語事實を地圖の形で示すことに至りうるものである。しかるとき、吾々は最初の世界言語圖卷に對する基礎的資料を有するわけである。

（四）諸言語の働き及び內的の性質に關して完全な觀念を與へるために、以上の蒐集のほか、當該各方言に於ける地方語で書かれたる生粹のテクストを蒐集し且つ出來うる範圍に於て蓄音機を用ゐた方言の採錄を爲す必要がある。

以上がメイエの世界の言語調査に對する提議とハーグの言語學大會の決議の大要であるが、その後その下準備として和蘭から言語學文獻目錄が著はされてゐる。又トゥルベツコイ侯が「音韻論と言語地理學」なる一論文のうちに音韻の調査が一國語の外に及ぶ場合を取扱つてゐるのも、この事情によるのである。

言語地理學は以上の如く、その興りの新しきに拘らず可成り有力なる言語研究法とされてゐるのであつて、メイエの考へる如き世界の調査は措き、少くとも吾々の住む國の現在の言語狀態のこの方法による組織的調査は恐らく時日の問題と積極的なる指令の問題を殘すのみであらう。從つて不斷に吾々は擧つてこの地上のコロンブス航海の開始に

昭和十年三月二十五日印刷
昭和十年三月三十一日發行

國語科學講座
（第十二回配本）

東京市神田區錦町一丁目十六番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 株式會社明章印刷所
代表者 細谷祐三

發行所 東京市神田 株式 明治書院